ふれあいリビング

場を設けることで、世代間の交流が――。独居老人問題にも一役買った地域のサロン。

岸和田春木住宅

ふれあいリビング

「春ケ丘の郷」

昨今は世代間の会話不足。府営住宅内でもこれが起因となり、独居老人の問題が浮上してきました。高齢者の閉じ込もりや安否確認、しいては各家庭の交流まで、少しでも役立てればと始まったのが「ふれあいリビング」です。既存集会所の一部を改装し、すでに12ヵ所の府営住宅で実施され、どの実施住宅からも「やってよかった」との声が聞かれます。今回は今春スタートした岸和田春木住宅にて、その好評ぶりを取材しました。

「5月から始めたんですが、思った以上に好評で、スタッフも楽しんでやってくれています」と言うのは岸和田春木住宅の会長を務める望月満慶さん。現在は月・水の2日間の運営ですが、次第に口コミで広がり、今では周辺の団地からも訪れるという盛況ぶりに。

岸和田春木住宅は昭和32年から入居が始まった府営住宅でも古参の部類。昨年50周年を迎え、記念に気軽に集まれる場所を作りたいと思っていた矢先に「ふれあいリビング」の提案を受けたそうです。望月さんは「この何年かで独居の高齢者が増えました。どうにかして日頃の情報が入らないのかと考えを巡らせていたところだったので、ふれあいリビング・の設置はいい機会でしたよ」と語ります。

月・水と行ってきた「ふれあいリビング」を子供も利用できるようにと、8月は水・日に変更。保護者同伴で子供に来てもらい、自由に遊ばせているとのことです。

「老人が輪投げなど昔懐かしい遊びを子供達に教える様はまさに世代間の交流。これからも色んな世代が使える場にしたいです」と抱負を語ります。岸和田春木住宅以外の他町の人にも使ってもらい、ふれあう場を少しでも多く設けたい。こんな思いが笑顔や会話となって少しずつ広がっているようです。

注）この記事は、2007年秋号のふれあいだよりに掲載されたものです。内容はすべて掲載当時のものです。